

## ニーチエの言語表現について

——『ツアラトストラ』を中心にして——

菅野孝彦

ニーチエを「詩人哲学者」と呼称し、その思想性を軽んじる見方には、われわれは異議を唱えねばならない。なぜなら、ハイデガーが『ニーチエ』において「詩的なもの」と「理論的なもの」とを区別する見方に反対し、その区別づけの無意味さを看破しているように、ニーチエにとって「詩的な表現」はけっして哲学の厳密性から逃避しようとするような表現ではない。そうではなく、むしろ、やむにやまれぬ彼の思想表現の手段あるいは道具といえるのである。直截に言うならば、ニーチエは認識を逃避し詩へと向かうのではなく、「認識そのものを詩へと昇華」させようとするのである。一八八五年『悲劇の誕生』に補筆された「自己批判の試み」において語っている。

「この新しい魂は、歌うべきであった。語るべきではなかった。あのとき私が、言わねばならなかったことを詩人として

言わなかったのは、なんと残念なことであつたらうか。たぶん私には、それが出来たであらうに。」<sup>3)</sup>

ニーチエにとって、詩的形式を用いての思想表現は、明らかにこうした自覚のもとに行なわれるのである。このことは彼自身、エルヴィン・ローアが『ツアラトストラ』の文体について与えた賛辞に応えた書簡において「ともかく、私はどこまでも詩人——この概念のあらゆる限界に及ぶまでの詩人なのだ。」と書いていることに如実に現われている。しかしながら、ニーチエはそうした詩的形式に全幅の信頼をおいているわけではない。彼は、詩的形式、というよりも詩の要素となる言葉そのもののへの不信をいたるところにおいて語っている。

一八七三年に書かれた小論文「道徳外的意味おける真偽について」では、「言葉の多様性においてただちに気がつかれることは、言葉と事物が完全に必然的に一致することはあり得ず、

言葉はつねにひとつの象徴にすぎないという事実である。」<sup>(5)</sup>と語り、人は言葉によって何らひとつとして正確な実在を捉えることはできず、言葉による伝達はそうした曖昧な真理の伝達に終わらざるを得ない、とされる。すなわち、「人間はその危機にあつて、言葉のためにはや自分を明らかにすることが出来ない。つまり自己を真に伝達することが出来ない。……言葉はいたるところでそれ自体ひとつの暴力となり、亡霊の腕をもつて人間を捉え、心にもないとところへと追いやる。」<sup>(6)</sup>のである。「人間のあまりに人間的な」でも、言葉の世界と発話者自身が思索した事柄それ自体とのずれが語られる。「言葉が文化に對してもつ意義は、人間が言葉の中にひとつの独自の世界を、もうひとつの世界を並置したこと、また彼がそこに立ち、別の世界を釣り上げ、そしてその世界を支配するに十分で堅固な足場を築いた、ということにある。長年にわたり概念と事物の名称を永遠の真理と信じていたかぎり、人間は自分を動物より上位たらしめているあの誇りを我がものとし、それゆえ、言葉の中において実際に世界の認識を所有していると考えていた。」<sup>(7)</sup>こうした観点で、「思想と言葉。人は自分の思想でさえも完全に言葉で再現することが出来ない。」<sup>(8)</sup>という『悦ばしき知識』の言葉が首肯されるのである。

たしかに、こうしたニーチェの言葉への不信は、『悲劇の誕生』において表明された芸術形而上学に対する批判から生じた芸術一般への批判的傾向という、彼の思想発展の中期の特徴として理解することも出来よう。しかし、言葉へのニーチェの不信は、

より根源的な部分に根ざしているといえる。<sup>(9)</sup>それは、既成の価値の網の目にとらわれることなく、つねに確実な真理を求めて懐疑的に、前進的に探究する精神という、中期の特質に終わるものではない。事実、言葉への不信はニーチェの後期思想の展開においても示される。『偶像の黄昏』において語っている。「われわれは、自らの気持ちを伝達しようとするとき、もはや自分を十分に尊重してはいない。われわれの本来の体験は、徹頭徹尾多弁ではない。体験は、そう思うとしても自分自身を伝達することが出来ない。原因は、体験には言葉が欠如しているからである。われわれがそれを言い表すことの出来る言葉をもつ圏域をわれわれはそとに超出してしまっているからである。すべてを語るこのうちには、一粒の軽蔑が潜んでいる。

言葉は、ただ中位の事柄、平均的な事柄、伝達できる事柄のためだけにのみ、発明されたように思われる。言葉を用いるとき、話者は自己を通俗化しているのである。」<sup>(10)</sup>言葉の仮面性について論じられるのは、払拭しようとするけれども払拭することの出来ない以上のような言葉に対する不信の念からである。「世をはばかる者は、沈黙を守ろうとするために語るのであり、そうした伝達を避けるのに尽きるところがない。彼はそう欲するのであり、彼のひとつの仮面が彼自身のの変わり友人の脳裏を往来するようにと差し向け得る。いや、たとえ彼がそれを欲しなくとも、いつか彼は、そこにあるのはやはりひとつの仮面なのだということに気がつくであろう。すべての深い精神は、仮面を必要とする。そればかりか、すべての深い精神の周囲には絶えずひとつ

つの仮面が生じる。」<sup>11)</sup>ニーチェは、深い精神として言葉によって自己を表現し続け、また言葉から生まれだたものにはかならず概念によって思惟をし続けながら、絶えずその根底においてはその言葉それ自体への不信をもち続けたのである。

言葉に対する強いニーチェの不信は、見方をかえるならば、十全な信頼を置くことの出来ない言葉を用いてしか自らを伝達し得ないことへのいらだちといえる。またわれわれはそこに、やみがい真理伝達の情熱と、その伝達手段としての言葉への不信との乖離に対する彼のジレンマを見出さざるを得ないのである。本稿の課題は、こうしたジレンマの中でニーチェが如何にして自らの思想を伝達しようとしたのかを明らかにすることにある。すなわち、ニーチェは言葉を手段とせざるを得ない思想伝達の過程において、言葉への不信を克服したのか、あるいは克服できぬままに終わったのかを、とくに主著である『ツァラトストラ』を中心に考えていく。思想伝達の手段としての言葉に対する彼の境位を示すことよって初めて、ニーチェが用いる言葉の意味が確定され、言葉によって表現される思想が、謎めいたものとしてではなく、明らかにされた言葉の意味のかぎりにおいて明白となるのである。

## 一 『ツァラトストラ』における表現法

以下は、『ツァラトストラ』を通じてニーチェの言葉に対する境位を明らかにする試みである。ニーチェは、先にあげたロー

デ宛書簡において記しているように『ツァラトストラ』を「詩人」として著わした。それは、とりもなおさずこの著作が詩作品であることを意味しているといえる。そこで『ツァラトストラ』を詩作品としてみたときにあらわになる諸特徴をあげてみたい。<sup>12)</sup>

まず、思想伝達の単位となる単語の次元において『ツァラトストラ』の特徴を追う。この次元においては、言葉の形象化と律動化を実現せんとするニーチェの表現法が見出される。<sup>13)</sup>

①接統詞EINを使った同義語、同等語、対照語の並列。太陽と月・鷲と羊・蜜蜂と蠅といった対照語においては、二つの極を対置した緊張が、意味と音の上に不協和音となつてはねかえり、力動的なリズムを産み出す。しかしこの表現では、言葉の連鎖反応を引き起こす基本単位となり、意味を強める音の効果が高まるが、一方、意味の重点の所在がぼやけてしまい、曖昧さを生む原因となる危険性がつきまとう。

②反復、変奏、対照。単語レベルでの同義語、同等語、対照語の並列を文・段落・章へと拡大したものと見える。変奏の例「彼らがその湿った心臓を押しつけるとき、炎は不機嫌となる。賤民が火に近づくと、精神そのものが沸騰して煙る。」<sup>14)</sup>前の文を後ろの文が変奏する例である。同じような調子や内容を繰り返した段落が多く、『ツァラトストラ』全体があたかもさまざまな小渦を呑込んだ大渦の観を呈す。反復、変奏、対照は、文や思想が次第次第に出来上がっていく生成形式といえる。

③比較級と最高級、前綴 über とは語尾の名詞。性質、状態の程度を強調する語法は、発話者における緊張、高揚、充実の感情を表示する。「お前たちの種族のいよいよ多くの者が、いよいよ優れた者 Inner Mehr, immer Bessere eurer Art sollen zu Grunde gehn が没落して行かねばならない。なぜならお前たちはいよいよ悪い、いよいよよきびし、immer schlimmer und härter 運命を背負わねばならないからである。」<sup>(15)</sup>語尾は、行動的、男性的な意志を表わし文のリズムを強める。

④二格。通常四格支配となる動詞の目的語を二格で表わす。擬古文調の表現となり、文のリズムに莊重感を与える。「あまりにも多くの蜜を集めた蜜蜂のように wie die Biene, die des Honigs zu viel gesam melt hat」<sup>(16)</sup>

⑤副文以外に思想の完結を遅らせる語法と記号。形容詞の後置・同格的言い換え・シュトリッピ・ドッペルプункトによる補足がある。

- (1)形容詞の後置。畳み掛けることにより、文のリズムを力動化するとともに、副文止めに似て発言内容に思慮深い重みを加え、ときには同種あるいは異種の形容詞によって最初のイメージを強化、修正する。「かくして彼らほもっと立派な肉食獣にならなければならない、もっと繊細な、もっと賢明な、人間にもっと似た Bessere Raubtiere sollen sie also werden, feiner, klugere menschen-ähnlichere」<sup>(17)</sup>
- (2)同格的な言い換え。「誰がお前を愛さなかったであろうか、

お前、無邪気で性急で、風のように急ぐ童眼の罪人よ Verliebe dich nicht, dich unschuldige, ungeduldige, windseilige, kindsängige Sündernin」<sup>(18)</sup>

(3)シュトリッピ。沈黙のうちに、反省・批判・当惑・切迫した感情を込め、思考のテンポをせき止める。疑問文における当惑や反省が込められた用法である。「まだ私はもっているのだからかーひとつの目標を Habe ich noch ein Ziel?」<sup>(19)</sup>文末を強調し、文の頂点となる部分を最後に独立させる「ひとつの湖が、隠者のような自己充足的な湖が私の内にある。だが、私の愛情の奔流がそれを拉致して駆けおりるー海原へ mein Strom der Liebe reißt ihn mit sich hinab zum Meere」<sup>(20)</sup>。感情を内に秘め、沈黙にいたる表現となる。「夜だ。いまこそすべての愛する者たちの歌が目覚める。そして私の魂もまた、愛する者の歌だ。 Und auch meine Seele ist das Lied eines Liebenden.」<sup>(21)</sup>

(4)ドッペルプункト。読者の注意を喚起して、続く主張の印象を強めるのに役立つ。同格的な言い換え「この新しい表を、私の兄弟たちよ、私は汝らの上にかかげる…硬くなれ! Diese neue Tafel, oh meine Brüder, stelle ich über euch: werdehart」<sup>(22)</sup>。原因と結果を対照させる転換点「たしかにわれわれは、収穫を終わっている…しかしなぜわれわれの果実は、みな腐れ褐色になってしまったのか」。ドッペルプункトの多用は、シュトリッピの多用と同様にすでに常識的なリズムや調和を破壊する。

⑥強調体。話者における心理の重点の所在を示して視覚上の強音の効果を發揮する。「人間において偉大であるところのものは、人間がひとつの橋であつて、目的ではないということである。人間において愛される得るところは、人間がひとつの過渡であり、没落であるということである。」<sup>(21)</sup>

⑦感嘆符、疑問符。話者の意欲、呼びかけ、命令、予見、断定、反問、疑問、仮定、願望をあらわし、さらにこれらの複合が既成の公式を解体する。その多用が、激しい感情の起伏をあらわす。感嘆符「汝大いなる 星辰よ！もし汝が照らす相手をもたなかつたならば、汝の幸福とは何であろうか！」<sup>(22)</sup>「悲愁は語る、へ破れよ、血を流せ、心臓！さまよえ、足よ！翼よ、飛べ！彼方へと！上方へと！苦痛！く」と。Brich, blute, Herz! Wandle, Bein! Flugel, flieg! Himal! Himauf! Schmerz!」<sup>(23)</sup>。疑問符「私は預言者か？夢みる者か？酔つた者か？占師か？真夜中の一鐘か？Bin ich ein Wahreger? Ein Träumender? Ein Trauender? Eine Mitternachts-Glocke?」<sup>(24)</sup>また「理性は獲物をあさる獅子のように知識をあさるのであろうか？<sup>(25)</sup>理性は貧困と汚れと憐れむべき愉快である。」<sup>(26)</sup>

⑧倒置法。動詞、否定詞を先置することにより、文のリズムが単調となることを避け、かつ力強い響きを与える。

Nicht auf euch warte ich hier in diesen Bergen, nicht mit euch sarf ich zum letzten Male niedersteigen. Als Vorzeichen kamt ihr mir nur, dass schon Hoehere zu mir unterwegs sind, / nicht die Menschen der grossen Sehn - sucht, des grossen

Eckels, des grossen Ueberdrusses und das, was ihr den Ueber-rest Gottes nanntet<sup>(27)</sup>

（私がこれらの山中で待っているのは、汝らではない。私が汝らとともに最後に下降するわけには行かない。汝らが私のところへ来たのは、さらに高等な者たちが私のもと至るべく途上にあることの前兆としてにすぎない。

より高等な者たちとは、大いなる憧憬、大いなる吐き氣、大いなる嫌氣をいだく人間や、汝らが神のなごりと呼んだもののことではない。）

⑨動詞の省略。体言止めによって、文全体のリズムに効果的な変化を与える。「危険な進行、危険な途中、危険な振り返り、危険な戦慄と躊躇。Ein gefährliches Hinüber, ein gefährliches Auf-dem-Wege, ein gefährliches Zurückblicken, ein gefährliches Schaudern und Stehenbleiben」<sup>(28)</sup>「牧人の非在、そして畜群！Kein Hirt und Eine Heerde!」<sup>(29)</sup>

⑩遊戯的な語法。「遊戯」がニーチェ哲学の中心命題として解釈される点でもあるが、言葉の両義性に基づく掛け言葉や、類音性に基づく語呂合わせのような言葉の戯れである。

(1)造語 隣人愛 Nächstenliebe / Liebe zum Nächsten に対する「遠人愛 Liebe zum Fernsten」<sup>(30)</sup>

(2)逆説「自分自身をいたわることの多い者は、そのいたわりの多さのためにしまいは病弱となる。ひとを苛酷にするものこそ、讀えられるべきである。乳と蜜との流れている国をわたしは讀えない。」<sup>(31)</sup>

## 二 『ツアラトストラ』と比喩

『ツアラトストラ』の言語表現の特徴を、この著作を詩作品たらしめる所以にほかならぬ比喩による思想伝達の観点から考えてみると、端的に言つて、ニーチェの『ツアラトストラ』の試みは、感覚のない詩的形象をともなつた思想の伝達であるといえる。しかしながら、ここにも、言葉への不信感を払拭することが出来ないにもかかわらず、詩人としてあらざるをえないニーチェのジレンマをみる事ができる。

「神とはひとつの思想であり、それはまっすぐなものを歪め、すべての立つてゐるところのものにめまいを起こさせる。それは、如何なる思想であろうか。時間が消失してしまふといふのであろうか。そして、すべての過ぎ行くものは虚偽であるといふのであろうか。……すべての過ぎ去らざるもの——これはひとつの比喩にすぎない。それゆゑ、詩人はあまりに多くを欺くことになる。」<sup>35</sup>

『ツアラトストラ』のニーチェにとつて、神や永遠の真理といった大なる力への、揺るぎなき信頼の念は、すでに欠落し、「過ぎ去らざるもの」の比喩的性格のみがあらわとなる。「すべての神々は、詩人の比喩であり、詩人の案出物」<sup>36</sup>となる。

『ツアラトストラ』においてさまざまに散りばめられた比喩の数々は、直喩と隱喩とに大別できる。直喩は、ある事象が緊密な類似性をもつたひとつの感覚的な事象と意識的に結びつけ

る。ある事象がここでは、別の具体的な事象と類似性を介して直接結び合わされ、話者の伝達されるべきものが聞き手によって了解される。この直喩においては、例えば「鉄のような精神」にみられるように、精神の本質が鉄のもつ固さによつて比喩される。鉄の固さという感覚性・形象性でもつて、精神に対して話者が抱く思念が伝達されるのである。すなわち、直喩においては、ある事象（例では、精神）と具体的事象（例では、鉄）との類似性が問題となる。一方隱喩においては、比喩される事象と比喩する事象との間の類似性がきわめて曖昧である。そこで、伝達しようとする事象と比喩に用いられた事象との類似性が希薄であるとき、二つの事象間の類似性が希薄であるにもかかわらず結びつけようとする隱喩の話者の存在がきわめて重要になる。言い表された事象と隠された事象を、特定の連関において結びつけようとする話者の存在が、一事象の間に入り込み、新たに三者構造の緊張した思想伝達の場を形成するのである。

隱喩のもつこの構造を『ツアラトストラ』において語られる「眠っている人々」の比喩で考えることができる。「覚醒した者であるツアラトストラよ、今汝は、眠っている人々のもつて、何をなそうとするのか。」「覚醒した者であるツアラトストラよ、今汝は、眠っている人々のもつて、何をなそうとするのか。」<sup>37</sup>

「眠っている人々」の直接的な意味は、明らかに生理的に睡眠状態にある人々をさしている。しかし比喩的表現として考えるならば、「眠っている人々」は覚醒したツアラトストラに対立する非覚醒者、平穩な生活につかる幸福主義者をあらわすと

いえる。「眠っている人々」は、哲学的課題に対してツァラトストラと同様には、覚醒してはいないのである。実際には眠っていないところの人々を「眠っている人々」と表現することは、比喩を發した話者の主観的な操作——二対象を結びつけたこと——に注目させる。ここで話者は、対象の主要特徴を「平穩な生活につかる幸福主義者」に認め、それを強調するために表現を他の価値系列（生理的な眠り）へと主観的な判断、直観による操作を行なう。この表現の選択、転換の過程において、生理的な「眠る」の語は、比喩の緊張とともに話者の経験を伝達するのである。

こうした隠喩表現には、四種類の型をみることが出来る。

①擬人法的隠喩「海が、かたい褥の上で夢をみながら、身体をうねらせてゐる。Es [Meer] winder sich träumend auf harten Kissen」<sup>(38)</sup>

②動物の隠喩「ツァラトストラが、死んだ犬を運び去る。Zarathustra trägt den toden Hund davon」<sup>(39)</sup>

③具体から抽象へと向かう隠喩  
「勇氣は笑うことを欲する。der Mut will lachen」<sup>(40)</sup> 勇氣

という具体的な言葉が、「勇氣ある者」の謂いとなる。

④共感覺的な隠喩「わたしは愛する。黄金の言葉を自らの行為に先立って投げ、そしてつねに、自分が約束するよりさらに多くを行なう者を。」<sup>(41)</sup>「おそらくはわたしが、無口な冬の天空から、長く明るく輝く沈黙を学んだのであろうか。」<sup>(42)</sup>「黄金」と「言葉」及び「長く」と「明るく」とが異質の感覺を

あらわす語を組み合わせた例である。

この他にも、さらにいくつかの複合概念の形成について指摘することが出来る。

(1) シュトリッヒを用いての結合

「嘘に凝りかたまつた一洞窟 Lügen-Höhle」<sup>(43)</sup>「隠者——鷲の——勇氣 Einsiedler- und Adler-Muth」<sup>(44)</sup>

(2) 二格による結合

「灼熱せる知恵の陽光 Sonnenbrand der Weisheit」<sup>(45)</sup>

(3) 同格の名詞の並列による結合

「私が嘲笑する、この黒く重い雲 diese Wolke, die ich unter mir sehe, diese Schwarze und Schwere」<sup>(46)</sup>

(4) 既成名詞を構成要素へ還元する語法

結合による比喩ではないが、用法のひとつにあげられる。

ニーチェは、以上のようにときとして二つ以上の言葉を文法や常識や論理を無視して、またそれに劣らぬ感受性をもって組み合わせるのであるが、そのことによつて、本来の意味が積算されるばかりでなく、感情の遠近や濃淡が絡んで新しい効果が生み出されるようになる。

ニーチェは、隠喩の形成に自らの思想伝達の手段としての可能性を認めはするのであるが、それに対しても、まったきの信頼を置くことはできない。

「修辞において最も重要とされるのは、比喩である。しかし言葉自体が、その意味するものとの関わりにおいて、発端からして比喩に他ならない。言葉は、真の事象の代わりに時の流れ

の内で鳴り響く音の像を提示する。つまり、言葉は何かを完全に表現し終えるということはない。言葉は、言葉にとつて際立つて見えるメルクマールをただ強調するだけである。」<sup>47)</sup>

### 三 むすび

さてこれまで、『ツァラトストラ』を解釈する上での予備的作業として、思想を伝達、媒介する言葉の問題を、すなわちそうした言葉へのニーチェの払拭しきれぬ不信感のありようを『ツァラトストラ』の作品における表現形式の特徴を示すことによつて明らかにしてきた。最後に、ニーチェが生涯を通じてとらわれた、言葉への「払拭しきれぬ不信感」について一度考察してみよう。

ニーチェが陥つていたジレンマは、自らの思想を伝達しようとする情熱と、その思想伝達的手段となる言葉の伝達能力への不信とにあった。そして、言葉への不信感を拭いきれぬままに、比喩的表現（とくに、隠喩的方法）によつて何とかして間接的にであれ思想を伝達しようとし、彼は『ツァラトストラ』を著わすのである。表現形式の上では、このようにこの著作を位置づけることが出来る。ところで、比喩的方法によらぬ形での伝達は如何に行なわれるのであろうか。たしかに比喩的表現の対極には、ヴィッセンシャフトリッヒな抽象化、一般化の道があげられる。それは、論理の筋道に沿つて対象の個性性を捨象し、普遍性を求め、対象を抽象化・一般化する道である。「す

べての認識の道具は、抽象化・単純化の道具であり、事物の認識ではなく、事物を占有することを企図している。(目的)と(手段)は、(概念)と同様に、存在の本質にあれることがない。」<sup>48)</sup>

これら二つの道、比喩的表現の道と抽象化の道は、明らかに相反する方向へと向かう。しかしながら、あくまでそれらは言葉の比喩的表現であり、言葉の抽象化なのである。すなわち、

『ツァラトストラ』におけるニーチェの比喩的表現は、言葉が本来的に内包する相反する二側面を(一方を肯定的に、他方を批判的に)あらわにし、そこにおいて彼自身が比喩的表現を自覚的に選びとつたことの証である。それゆへ、裏を返せば、ニーチェの比喩的表現は、言葉の抽象化作用への批判点を明らかにするといえる。

ニーチェが完全なる手段と認めないまでも、比喩的表現によつて思想伝達を試みるとき、抽象化・一般化・普遍化の道においては捉えきれなかつた対象の個性性の回復が企図される。そしてこの個性性の回復は、論理や体系構成の試みにおいては捉えきれなかつた、対象との出会いの直接的体験の回復を意味している。彼は、『この人を見よ』において『ツァラトストラ』執筆時に自らをおそつた体験について語る。

「突然、言葉に言い表せないような確実さと精妙さで、何か人の心の奥底から揺り動かすあるものが目に見えるようになり、耳に聞こえるようになるという意味での啓示概念が、ただ事実を述べるだけである。聞くのであって、探し求めるのではない。受け取るのであって、誰が与えるのかは問わない。

稲妻のような必然性をもって、躊躇ない形でひとつの思想がひらめく。<sup>(49)</sup>

『ツアラトストラ』は、このようにしてニーチェが体験した直接的な真理群―「永遠回帰」「力への意志」等―の集合なのである。この真理群こそ、ニーチェが言葉への絶えざる不信にもかかわらず、言葉の比喩の力によって伝達しようとした思想に他ならないことは明らかである。では、それは如何なるものであろうか<sup>(50)</sup>

かくしてわれわれは、ニーチェが伝達しようとする思想それ自体へと向かうことを次なる課題としなければならぬ。そのとき初めて、『ツアラトストラ』をもって発話するニーチェの哲学に一步踏み入ることが出来るのであり、また真のフィロローグ「言葉を愛する者」ニーチェの姿が、彼の哲学的衝動とともにあらわになるのである。

「哲学は、同時に生きた人格との緊張関係のうちで生き、この人格の深みと生の充実から内実と価値要求とを汲み取る。したがって、たいていはどの哲学的概念の根底にも、哲学者自身の人格的な態度決定が横たわっている。一切の哲学がこのように主体から規定されていることを、ニーチェはその仮借ない苛烈な思考の仕方と彫塑的な叙述の才能によって、哲学する衝動」という周知の定式にもたらししたのである。<sup>(51)</sup>

## 註

ニーチェのテキストには、Friedrich Nietzsche Samtliche Werke Kritische Studienausgabe in 15 Bänden, hrsg. von G. Colli u. M. Montinari を用いた。

(1)長い間ドイツの講壇哲学においては、ニーチェはけっして厳密な哲学的思索家ではなく、「詩人哲学者 Dichterphilosoph」と言われていた。Heidegger, Nietzsche I, Pullingen 1961, S. 13.

(2)Aa.O. S. 328.

(3)Bd.1.S.15.

(4)Friedrich Nietzsche Samtliche Briefe hrsg. v. G. Colli und M. Montinari, Berlin 1975 ff. Bd. 6 S. 479 f.

(5)Bd.1. S. 879.

(6)Bd.1. S. 455.

(7)Bd.2. S.30f.

(8)Bd.3. S.514.

(9)『悲劇の誕生』においては、「音楽と比較すれば、どんな現象も比喩にすぎない。したがって言葉は、現象の器官であり、象徴である以上、音楽のもっとも深い内容をあらわにすることは絶対に出来ない。」と言葉への不信が述べられる Bd.1. S.51. それゆえ、ニーチェの思想発展の中期の言語批判は、芸術がもつ思想伝達能力への疑念でもある。

(10)Bd.6. S.128.

(11)Bd.5. S.58.

(12)参照。サラ・ロフマン、宇田川博訳『ニーチェとメタファー』

朝日出版社 一九八六年。田村徹「ニーチェの主題、フーコーの変奏」『現代思想』第九卷第三号、一九八一年。大森五郎「ツァラトストラに関するノート」『中央大学ドイツ文化』第十六号、一九七三年。藪田宗人「ニーチェにおける『言葉』と『表現』について」『和歌山大学学芸部紀要(人文科学)』第一五号、一九六五年。

(13) 土井虎賀寿氏はニーチェの言語表現について、*Der höhere Mensch. Die höheren Menschen* の邦訳を取り上げ次のように述べている。ニーチェは本文中で呼び掛けとして繰り返し繰り返し活用する際には、*Ihr höhere Menschen!* という冠詞なき複数形をとらせて、ただ標題と、本質を語る部分にだけ単数形をとらせている。このことは冠詞 *Der* あるいは *Die* がこの言葉の現勢的活用においては省略されるも差し支えないことを示すとともに、*höhere Menschen* とどうやうに母音「エ」の発生的反復を音楽的に狙っていることを語る。そして *höhere* とどうやうに高く響く言語を中核として、全体として「エ」音を含むいくつかの音節を連ねることをもつて、一たゆたさのうちに「高まり行く」過程を音調的に響かせようとするモチーフを語っている。全体として *Yori Takai Ni-ingen Tachi* というやうに「エ」音を根幹として「り」から「ぎ」「に」「ち」へ音響がとがらせられつつ重さが狙われている。参照『ツァラトストラ』一九四八年、Ⅷ頁。

(14) *Bd. 4 S. 124.* (15) *AaO. S. 359.* (16) *AaO. S.*

11.

- (17) *AaO. S. 263.* (18) *AaO. S. 283.* (19) *AaO. S. 340.*
- (20) *AaO. S. 106.* (21) *AaO. S. 138.* (22) *AaO. S. 268.*
- (23) *AaO. S. 172.* (24) *AaO. S. 161f.* (25) *AaO. S. 11.*
- (26) *AaO. S. 402.* (27) *AaO. S. 402.* (28) *AaO. S. 15.*
- (29) *AaO. S. 351.* (30) *AaO. S. 16.* (31) *AaO. S. 20.*
- (32) ニーチェ哲学の本質を『遊戯 Spiel』にみる研究として、各々独自に展開された Eugen Fink, *Nietzsches Philosophie Stuttgart 1960* と、信大正三『永遠回帰と遊戯の哲学』勁草書房、一九六九年がある。
- (33) *Bd. 4 S. 77.* (34) *AaO. S. 194.* (35) *AaO. S. 110.*
- (36) *AaO. S. 164.* (37) *AaO. S. 12.* (38) *Bd. 4 S. 195.*
- (39) *AaO. S. 24.* (40) *AaO. S. 48.* (41) *AaO. S. 17f.*
- (42) *AaO. S. 219.* (43) *AaO. S. 128.* (44) *AaO. S. 358.*
- (45) *AaO. S. 185.* (46) *AaO. S. 48f.*
- (47) Nietzsche, *Großoktavausgabe Bd. XVIII S. 239.*
- (48) *Bd. 11 S. 164.* (49) *Bd. 6 S. 336.*
- (50) だが、ニーチェが自らの思想を比喩の力でもって完全に伝達できるとは考えていなかった。『ツァラトストラ』以降の遺稿の中で、「大いなる事物は、ひとがそれについて沈黙することを欲する。」*Bd. 13 S. 188.* と述べているが、「*h*」では思想伝達の不可能性すら語られているように思われ

る。思想伝達の可能性を問うための新たな出発点としなければならぬ。ヤスバースは、『理性と実存』において「思惟及び伝達の究極の姿は、沈黙である」と語る。Ver-nunft und Existenz, München 1960, S. 103.

(5) Heidegger, Die Kategorien - und Bedeutungslehre des Duns Scotus, Tübingen 1916, S. 4.

(文部省科学研究費補助金による研究成果の一部)

(かんの・たかひこ 日本学術振興会特別研究員)